

和牛の現状について

和牛について

- 和牛は我が国固有のものであり、改良機関や農家の長年の努力によって改良されてきたもので、我が国の財産である。
- 和牛には4品種があり、以下の特徴を備えているものが、血統登録されている。

・ 黒毛和種



古くから飼われていた牛で小格で前勝ちの体型。1918～20年に各県で登録が開始され、44年に固定した品種と結論。48年に全国和牛登録協会が発足し、登録は一元的に実施。被毛色は黒褐単色。

肉質に優れ「霜降り肉」を生産する。

	体高	体重
雄	147cm	720kg
雌	130cm	450kg

・ 褐毛和種



熊本では1923年に標準体型が作成され登録が開始。放牧飼養に適する牛として改良。

高知では、1939年から登録を開始。

ともに44年に「褐毛和種」として認定。48年全国和牛登録協会に登録。51年に日本あか牛登録協会が発足（熊本）。

被毛色は黄褐色から赤褐色。耐暑性に優れ、粗飼料利用性も高い。

	(熊本系) 体高	体重
雄	153cm	1,000kg
雌	134cm	600kg

・ 日本短角種



東北地方北部原産。1957年に審査標準を統一し、日本短角種として登録を一元化。登録は日本短角登録協会が実施。被毛色は濃褐色。

肉質は肉のきめがあらう。粗飼料の利用効率が高いことが特徴で、北日本の気候風土に適し、放牧適性が高い。

	体高	体重
雄	145cm	1,000kg
雌	130cm	580kg

・ 無角和種



1924年に登録が開始され、44年に無角和種として認定されて全国和牛登録協会が登録を実施。被毛色は黒色で黒毛和種より黒味が強い。

肉質の面では肉のきめなどが黒毛和種より劣る。

	体高	体重
雄	137cm	800kg
雌	122cm	450kg

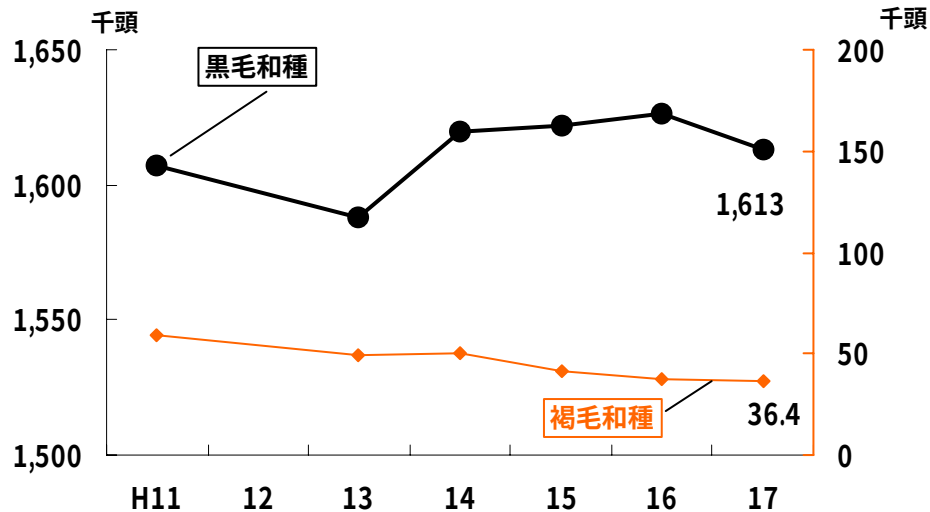
(参考) 家畜において固定種と考えられる条件

- (1) 同一の血統起源であること。
 - (2) 血量が一定水準以上に達していること。
 - (3) 特定の外貌上の特徴を共有する集団であること。
 - (4) 体格の大きさにおいて斉一性をもっていること。
 - (5) 経済的能力において斉一性をもっていること。
- ((社) 全国和牛登録協会「新・和牛百科図説」より)

飼養頭数の推移

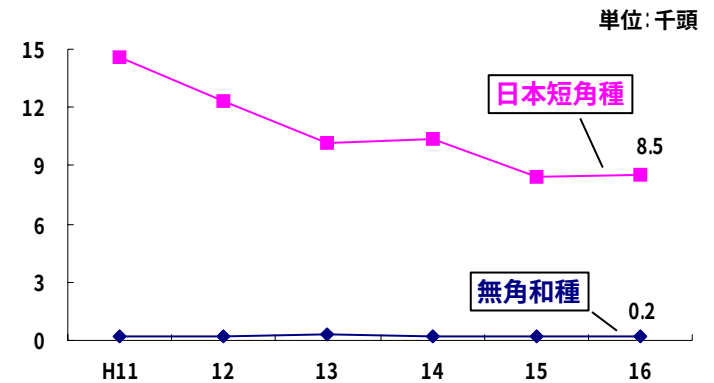
○和牛の飼養頭数は、14年は13年9月のBSE発生により出荷が停滞したこと等の影響によりわずかに増加したものの、近年は緩やかな減少傾向で推移。

和牛の品種別飼養頭数（黒毛和種・褐毛和種）



資料：「畜産統計」（毎年2月1日現在の数値。H12はセンサス年のため、数値がない。）

（参考）無角和種・日本短角種の飼養頭数

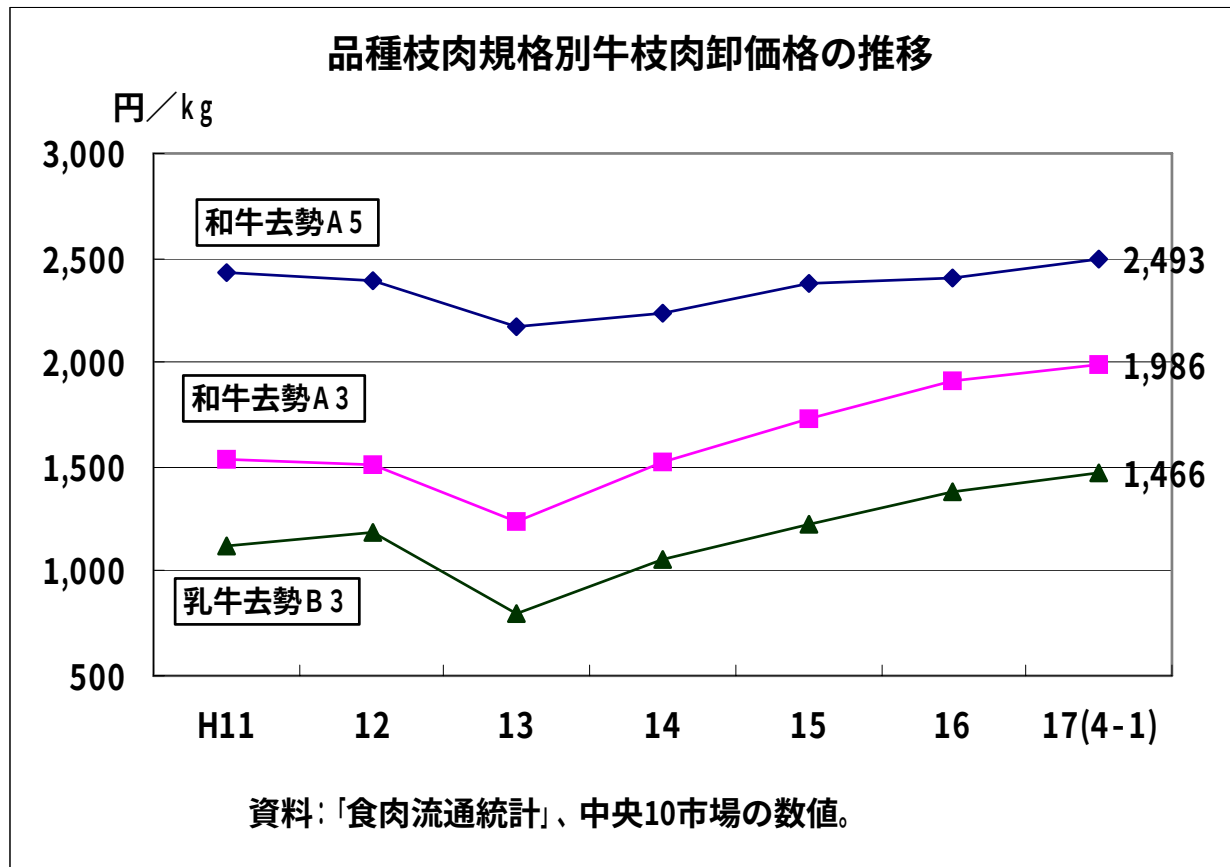


資料：家畜改良関係資料

注：雌牛頭数（全体（肥育牛を除く））と肥育牛頭数（全体）の合計値。

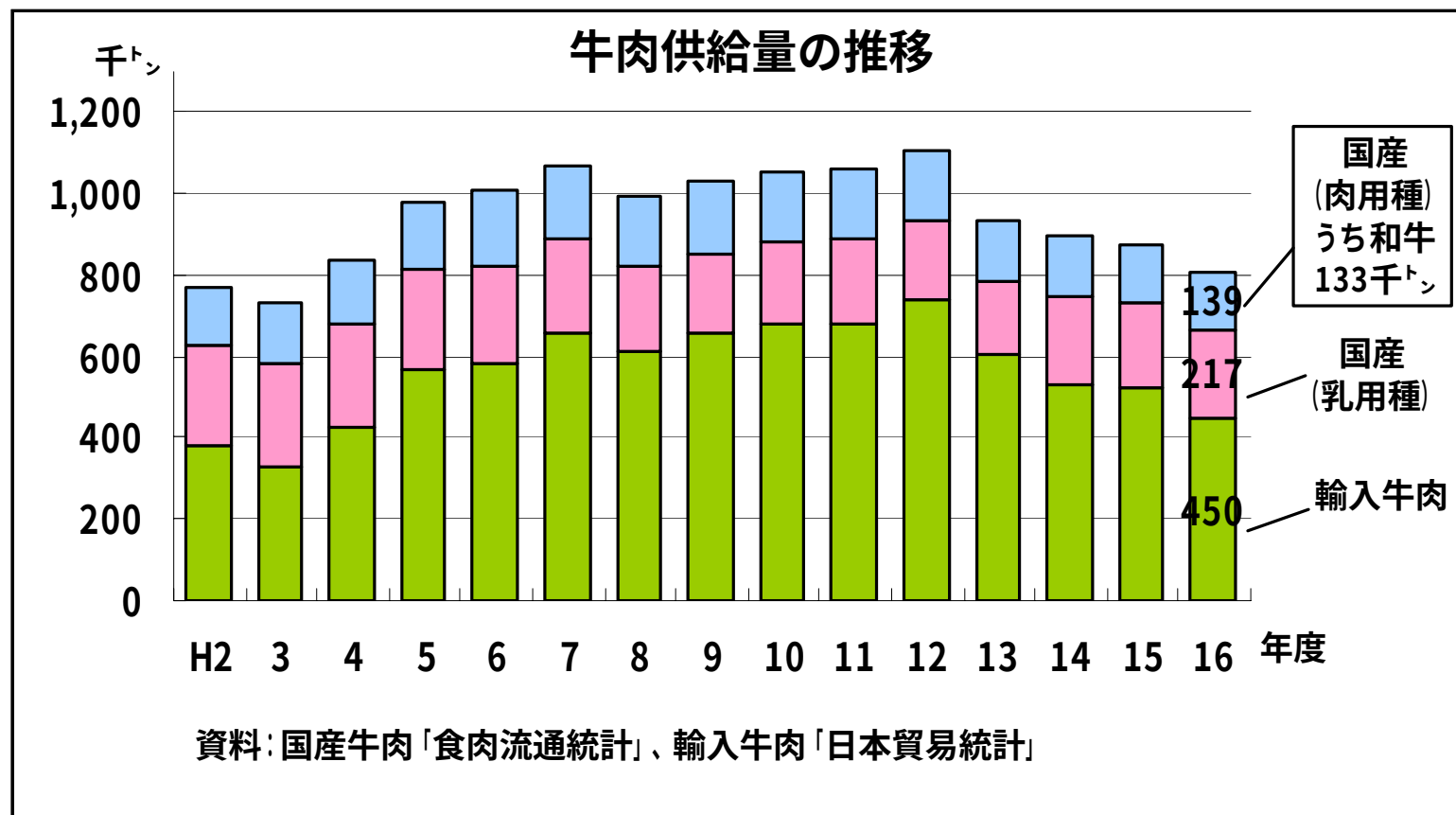
品種別枝肉規格別牛枝肉卸売価格の推移

○国内において和牛は、優れた肉質等のため、他の品種に比べ高い価格で取引されており、高い評価を受けている。



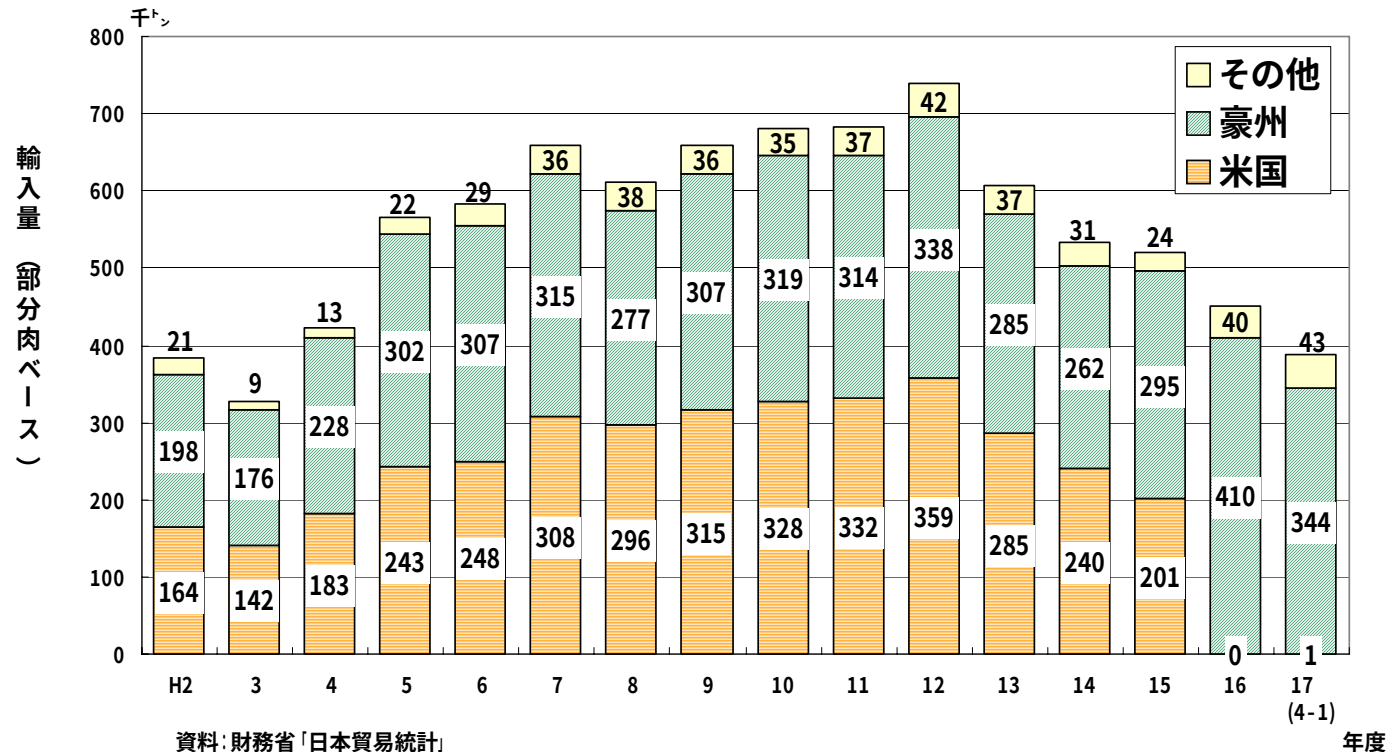
牛肉供給量の推移

- 国内に供給されている牛肉の約6割は輸入牛肉。
- 牛肉供給量のうち和牛肉のシェアは約15%程度。



牛肉の輸出入量の推移

○牛肉の輸入量は、14年度は、国内初のBSE発生により国内消費量が減少したことから、減少。15年度以降は、米国でのBSE発生に伴う輸入停止措置の影響により減少（豪州産牛肉については増加）。

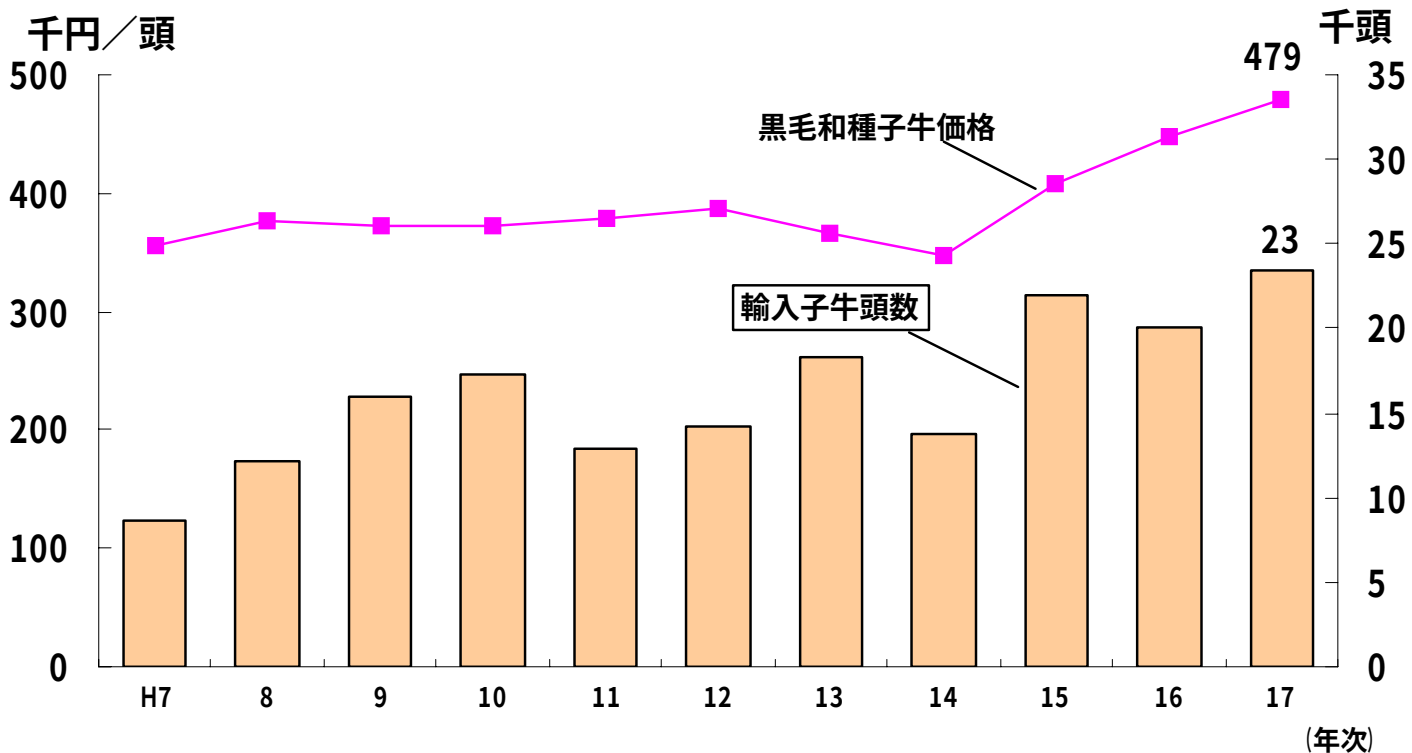


○牛肉の輸出は、我が国において口蹄疫（H12）・BSE（H13）が発生したことから、米国等で輸入が禁止。17年12月に米国及びカナダで日本産牛肉の輸入が解禁。現在、香港、台湾、EU等と輸出再開に向け協議中。
（BSEによる禁止前の輸出量は増加傾向で推移しており、H11年度は396トン。）

生体牛の輸入について

- 生体牛の輸入のほとんどが、肥育もと牛。
- また、国内の肥育もと牛価格が高い場合、輸入頭数が増加する傾向。

国内肉用子牛価格と子牛輸入頭数の関係



資料：(独) 農畜産業振興機構 「全国の子牛取引情報」、動物検疫所業務統計

注：動物検疫の検疫枠の制限のため、近年は肥育もと牛の輸入は、2万2～3千頭程度が上限 (H17実績2万3千頭)。